

チャペルの窓

「津波警報」



黒田 朔

津波警報が出た。震源地は3000km離れたロシアのカムチャッカ、地震発生は7月30日午前8時。津波警報は警報が出されても、津波はいつごろ着くのか、どのくらいの高さなのか、いや、本当に来るのかどうかも分からない。

しかし、今までの東日本大震災や能登半島地震の経験とやがて起こると警告されている南海トラフ地震への不安が一つになって日本中が一日、津波対応に明け暮れた。幸い大きな

被害もなく、警報が注意報に、やがて、注意報も解除され、TV もいつもの番組に戻り、安心した。

今回の津波警報体験で気づかされたことがある。一つは、世界は一つ、私たちはお互い繋がり、地球に住んでいる。どんなに離れていても影響し合って生きているということ。ハワイの James & Mona さんからお見舞いメールが届く。ハワイも無事だったとのこと。息子からは避難指示があり島中が渋滞の渦、渋滞が解けた頃、津波はとっくに終わっていたとのこと。津波の避難には車は使わないと日頃から頭に入れておくことだ。

更に、もう一つは物事は見える世界がすべてではないことだ。「大阪ではお隣の岬町淡輪で10cmの津波を観測」などのニュースのように、表面は大過なく収まり、「ヤレヤレ」ではあったが、翌日の三陸海岸のニュースで、表面はそれほど高い津波ではなくても、繰り返し、押し寄せた津波で海中は掻き回され、牡蠣いかだは大被害、回復には2年はかかると知った。物事は表面だけ見ているだけでは分らないことが多いのだ。

高知の学校でいた頃、毎学期、「南海トラフ地震」に備えて避難訓練をした。ある時、訓練が終わった時、指導に来た消防署のスタッフが言った言葉が忘れられない。「先生の時代には来ないかもしれませんが、生徒たちは必ず、大地震に会いますからね」

これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

I コリント 10:11、12